

置いてゐたので彫刻師や鑄師飾師各自が没交渉で夫々の技術を擔當する風があつた。その結果不生産不經濟であることを免れないが近頃は外國品で美術的な上に價の廉いものがどしどし輸入される有様にこれが防止策と日本舊式技術の慣例を打破して外國のそれの如く新技術法に依つて天晴外國のものを凌駕させやうといふので先づその技術者の養成を第一とすべく今度東京美術學校に工藝學の新講座を設置することゝなつた。講師は明治三十九年同校出身、四十年農商務省から金工藝實業講習生として渡米し三年間ロードアイランド州工藝圖案學校とマサチウセツ工藝學院に金工藝を専攻して爾來米國で實地經驗を積むこと十有餘年間昨年歸朝した鈴木清氏が擔當することゝなつた。之に依つて今後我國の金屬工藝界の不統一を刷新する計畫である。

鈴木清は明治三十九年鑄金選科卒業、東京砲兵工廠銃包製造所、砲具製造所銅像鑄造所勤務の後、鑄金術研究のため農商務省海外実業練習生として渡米し、日本輸出の鑄銅器の調査、銅像鑄造法及工作法、銀器及鑄造製作法を修業、ロードアイランド州プロビデンス市ゴーハム会社彫金部をはじめ、教社で金工図案係、装身具図案及銅型製作に従事、のちに三井物産会社社紐育支店の委嘱により紐育グロブチー会社新英州總代理人、營業部支配人を務め、渡米から十四年後の大正十年八月に帰国した。大正十一年十月十二日本校講師に起用され、金工科、鑄造科の工藝製作法を週に四時間担当した。なお、『東京美術學校校友会月報』第七卷第一号に「鈴木清氏よりの近翰」、同卷六号に同「近信」、同卷第十号に鈴木著「米國に於け

る鑄造品需給並に嗜好の状況」が収録されている。

#### ⑥ 東京高等工芸學校開校・製版科廃止

大正十年十二月九日、東京高等工芸學校が設置され、翌十一年四月より授業が開始された。第二卷に記したとおり、元東京高等工業學校教授松岡寿、同安田祿造らは官立工芸學校設立運動を熱心にすすめていたが、折りよく大正七年原内閣の文部大臣中橋徳五郎が提出した「高等諸學校創設及擴張計畫案」が帝國議會で成立して八年度から十三年度までの六年間に計畫が実施されることになり、松岡らの計畫も実現した。東京高等工芸學校の後身にあたる千葉大学工學部の『創立40周年記念』（昭和三十六年、長谷川一郎編）によれば、創設当初の同校は東京市芝区新芝町の芝浦埋立地にあり、工藝圖案科、同科附属工芸彫刻部、金屬工芸科、金屬製品分科、同精密機械分科、木材工芸科、印刷工芸科が置かれ、初代校長は松岡寿であつた。

本校はこの新設校に製版科を移管することとし、大正十一年三月三十日に文部大臣に上申を行なつた。その理由は次のとおりであつた。

#### 製版科廃止理由

本校製版科ノ設置ハ大正三年ニ在リ同年東京高等工業學校ヨリ同校工業圖案科並ニ同校付設職工徒弟學校製版科生徒ノ教育ヲ本校ニ委託セラレタル結果トシテ本校製版科ハ新設セラル、ニ至レリ延イテ大正七年三月ニ至リ始メテ第一回ノ卒業者三名ヲ出シ爾

後毎年數名ノ卒業生ヲ出シツ、アリ 其ノ成績ノ見ルベキモノナ  
キニ非ラズト雖モ元來製版ノ技術ハ工藝ノ範圍ニ属スベキニシテ  
本校ノ如キ純正美術ヲ主トスル学校ニ於テ之ガ教育ヲ為スコトハ  
其可否ニ就イテ固ヨリ幾多ノ議論ヲ生ズベキ餘地アリ 隨テ本校  
製版科ノ永久存續ニ関シテハ窃ニ考慮シツ、アリタリ 然ルニ大  
正十一年度ニ東京高等工芸学校ノ開設セラル、コト決定シ同校ニ  
ハ製版印刷ニ関スル印刷工藝科ヲ設置セラル、コト、ナレリ 是  
尤モ當然ノ設置ニシテ本校製版科ノ如キハ今後ニ於テ存續シ並立  
セシムルノ要ナシト認ムルナリ 本校ニテハ夙ニ東京高等工藝学  
校ノ開設ヲ機トシ本校製版科ヲ廃止スルニ決意シ既ニ大正九年ヨ  
リ同科ニ於ケル新入学生徒ヲ募集セズ本年三月二十四日同科ヨリ  
六名ノ卒業生ヲ出シ他ニ一人ノ在学生徒ヲ存セザルニ至レリ 因  
テ此際ヲ機會トシ同科ヲ廃止致度隨テ文部省令ニ係ハル東京美術  
学校規程中ヨリ製版科ニ関スル文字ヲ削除サレンコトヲ欲スルナ  
リ

〔自明治四十四年一月本校規則関係書類教務類掛〕  
至

この上申は直ちに認可され、同十二年五月二十六日付文部省令第  
二十五号を以て製版科は廃止された。同科の卒業生は合計四十一  
名。教官と設備の大半は東京高等工芸学校へ移された。教員（製版  
科授業兼担の臨時写真科教員も並記）の異動は凡そ次のとおりであ  
った。

結城林蔵 教授、製版科主任兼理事、製版  
術、製版術大意、製版実習担当

大正十二年一月退官。同年三月設立の小西写真専門学校校長に

就任。

伊東亮次 助教授、写真術、製版術、製版実習担当

大正十一年七月在外研究より帰国して同年八月東京高等工芸学  
校教授へ転任。

小林亀五郎 助教授、製版実習、製版術担当

大正十一年四月休職。同十二年四月休職満期退官。

戸塚暢夫 助教授、製版術、製版実習担当

同右。

矢野道也 工学博士、嘱託、色彩学、印刷術担当

大正十一年四月解嘱。

長口宮吉 助教授、工芸化学、化学実験担当

留任。

小柴英侍 嘱託、化学実験担当

大正十一年三月解嘱。

久米福衛 講師、写真実習、絵画、図案担当

大正十一年九月東京高等工芸学校嘱託教師を兼任。

森芳太郎 教授、工芸化学、光化学、写真術担当

留任。大正九年、同十五年鎌田弥寿治留学中臨時写真科主任兼  
理事。

鎌田弥寿治 教授、臨時写真科主任兼理事、工芸化学、光化学、写真術  
担当

大正十一年四月欧米留学より帰国し、翌五月東京高等工芸学校  
教授（印刷工芸科長）兼本校教授となり、同十二年本校講師兼  
務となる。

畑保之 講師、写真実習担当

大正十一年九月助教となり、写真実習を担当。

因みに、以上のうち戸塚暢夫は製版科の、畑保之は臨時写真科の、久米福衛は西洋画科の卒業生である。

鎌田弥寿治の転任には臨時写真科の移管問題がからんでいた。それについて、彼は次のように記している。

帰朝した時「大正十一年四月」、東京芝浦には前述の官立東京高等工芸学校が、生れたばかりの瞬間であって、私は上野の美術学校にあった写真科の施設やら、専任の教職員等々の全部を引き具して芝浦の新校へ移る筈であったが、ここにまた一種のトラブルが起り、美校の写真科の代りに、美校に数年前から存在して居った製版科（この事に就いては後に述べる）を引<sup>（き）</sup>を具して、新校芝浦に移り、私も新校の教授となり、芝浦校内には製版科の名を改めて、印刷工芸科という名によって独立した科が生れ、私はその科の科長を命ぜられた。

ただし、暗々の裏に、美校に残した写真科もやがて芝浦に引き取り、芝浦の印刷科と共に、芝浦で育成、永久に継続せしめることは、内々には決定して居ったのである。そして両三年遅れて、美校の写真科は芝浦の私の所に、その施設並びに職員等全部が移管されて来た。要するに予定通りに美校写真科は芝浦の東京高等工芸学校に移管されたのである。

（『日本写真教育史』鎌田弥寿治著。昭和五十年、東京写真大学短期大学部出版部）

これによって臨時写真科の移管をめぐる何らかのトラブルが生じ、移管にさき立って鎌田が転任したことがわかる。

その外に大正十一年八月には本校彫刻科教授畑正吉が、十一月には同金工科教授の神矢教親がともに新設校教授へと転任した。

#### ⑦ 工芸部生徒成績展覧会

工芸部は大正十一年三月二十五、二十六、二十七日の三日間、卒業製作展覧会に合わせて第一回成績展覧会を開催し、授業成績の作品を展示した外、即売品を展示し、記念絵葉書を発行し、喫茶店を設けるなどして一般の観覧に供した。好評であったため、以後この催しは恒例となり、大正十三年春に震災の余波で休止した外は毎年開催した。第二回展では入場者約七千人、売約千六百円という盛況を呈し、毎年概ね同程度の成果をあげた。第三回展以降第七回展までは『東京美術学校校友会月報』にその概況報告が掲載されているが、それ以後は何ら記載が無いので廃止された模様である。

#### ⑧ 津田信夫の在外研究

鑄造科教授、主任兼理事の津田信夫は大正十一年十月十三日に文部省より鑄造術および金工術研究のため満二年間アメリカ、フランス、イタリヤ在留を命ぜられ、翌十二年一月十八日に出発した。津田は明治八年十月二十三日に千葉県印旛郡佐倉町に生まれ、同三十三年本校鑄金科を卒業し、同研究科で学んだ後、同三十四年四月本校雇となった。以来助教（同三十五年一月）、教授（大正八年十一月）となり鑄造教育に尽くしただけでなく、本校依頼製作におけ